

④ 日本国特許庁 (J P) ⑤ 特許出願公開  
⑥ 公開特許公報 (A) 昭61-6097

⑦ Int. Cl.

B 63 H 1/36  
A 63 B 35/00

⑧ 出願番号

⑨ 庁内整理番号

7817-3D  
6547-2C

⑩ 公開 昭和61年(1986)1月11日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑪ 発明の名称 推進用尾ひれ

⑫ 特 願 昭59-125718

⑬ 出 願 昭59(1984)6月18日

⑭ 発 明 者 藤 田 紀 一 大津市日吉台4-14-12  
⑮ 出 願 人 藤 田 紀 一 大津市日吉台4丁目14-12

明 細 書

1. 発明の名称 推進用尾ひれ
2. 特許請求の範囲
  - 1 所要尾ひれの、前と両側面との外縁を成形したひれ本体、前縁を翼を設けることを特徴とする、推進用尾ひれ。
  - 2 ひれ本体、無尾性のものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
  - 3 ひれ本体、無尾性のものであって、側面部両側面を支持する締め付け具を有するものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
  - 4 前縁を翼を、ひれ先では側面方向へ傾斜し後方へ延びたがって、逐次、極めて鋭角したものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
  - 5 前縁を翼は、鋭角して、短きつねものである、特許請求の範囲第1項記載の推進用尾ひれ。
3. 発明の利便な説明

(産業上の利用分野)

小舟・模型船・遊具等の浮遊物体を、水中で移動する尾ひれに依って、簡単に進めしめるための推進用尾ひれに係る。

(従来の技術)

尾ひれの先を、板状のひれに成形し、水を流して推進するものがあった。

尾ひれの先に、板状のひれを所要の遊びをつけて接着し固定しながら、推進するものがあった。

尾ひれの先に、無尾性の板状ひれをつけ、水を流りながら、推進するものがあった。

(発明が解決しようとする問題点)

一体化された成形のひれや無尾性のひれは、堅固して、水中を移動するため、抵抗が大きい。従って、規定される移動行程の2分の1～3分の1が、ひれの運動や反りに費やされ、推進に供される行程を減らしていた。

ひれの面は、推進方向の非直線になるため効率が低かった。

傾斜したひれを上下に移動する場合に、ひれ

の役部が、運びのため浮上や沈下するのは、固  
脚が軌道に出来るか。た。

電着部・ストッパーに集中して大きな力が加わり、故障の原因にまつた。

ひれが大きくなると、必要の速度は増加するので、鈍重になった。

以上の理由によって、推進効果は良くなかった。

(問題を解決するたのめの手段)

従来の順位のひれを脱し、所長居ひれの、目と  
胸骨迄との外郭を成形したひれ押に、新款な眼を  
嵌めしたものを装飾する。

( 作 用 )

三方を固定した鋼は、船底により水の壓迫を受けて、ひれ先より屈曲されていさゝか後船の方へ、漁次大を円弧状の内腔を形作る性質がある。

この内閣で水を変えるため、我輩団体が同じ服  
 装のひれより勸告はよくなる。

この内腔は、ひれの動く方向に背して、加熱し  
た状態で出漿しているため、温入作用で細道が出来る。

この内腔の血は、反動する膜の勢より加速、共に

3の外郭を成形したもので、幾何体に取り付け  
一体となし、平面方向に張れるものである。又は、  
ピストン運動するものである。

このひれ中に、多数な膜4を配置して推進用足  
ひれとする。

第2図は、この発明の第2実施形態の1例を示す回路図である。

第1実験例のひれ種1を、無翅性ひれ種1としたもので、胎動停止時は胎数を胎4が伸張された状態であるが、胎動により、内臓状の内腔を作ると共に、ひれ種の両端3、<sup>2</sup>の動きを止め、内腔の形が出来あぐし、運動の死滅で胎数を胎4を伸張するものである。第1実験例と比較すると、胎数を胎4は、所定の内腔が出来あぐ、水を吸える量、無翅開口部より更に推進作用は向上する。

また、角錐の底面に依じて内腔面の傾斜が変化  
する。

第3點は、この説明の寫る製造關係の1例を示す點である。

外匯局61-6097 (2)

つけ足箱の位置や形により、計画的に、傾斜の角度・ツッパ状の張りをもたすことが出来る。

この内腔は、鰓の死点と海中かに反転し、進行に対応する内腔を作る。即ち、死点に於てひれ舟の動きが停止すると、水をはらんで強強していた鰓を屈は、拘束を解かれて降伏状態になる。今まで鰓に押されて鰓の通ると方向位を与えられた水は急に止まら<sup>0.6</sup>ない。水は~~鰓の通ると~~鰓に屈伏<sup>0.6</sup>した。鰓を屈は、鰓の通ると<sup>0.6</sup>ひれ舟の反対側に押しやりられ、反転した内腔を作る。故に、鰓の全行程は恒速の地に於ることが出る。

以上の作用点の相違により、従来のものでより更に推進効果を増大することが出来た。

( 興 隆 號 )

この契約の締結を、更に詳しく説明を要しない  
がら説明する。

第1図は、この発明の第1実施形態の1例を示す平面図である。

ひれ種 1 は、所要地ひれの、表 2 と例 2、3、

ひれ牌「は舞角姓であつて、その開口部の両側  
辺3、3を脱却するワイヤー6と結付付けねじ7  
を掛け、任意開口部の巾を小さくすることが出来  
るもので、即ち、装置した梁板を厚4<sup>分</sup>の板<sup>厚</sup>を食入  
るまですることが出来る。

第2頁の構造とある作用点は、齒輪の死点で、たるみをもった振動と第4は、軸を動かす運動状態になり進捗する水の勢で、ひれ押しの反対側に押しやられ、内部の図が反転するため、金銀の行進を促進の地になることと出来る。

第4部は、この説明の第4実施形態の1例を拡大して示したものである。

ひれ片1に、右軟骨4を、ひれ先2では側筋3、3万回へ振動し、後方へ返るに當って、塵次、ゆるめて振動したものである。指筋の血制に關係なく、計測した内腔の軟組織を形作り、筋3更運動と同じ縮減作用をする。

第5回、第6回、第7回は、この時刻の第5回  
第6回の数値を示す平均値である。

第 1、第 2、第 3、第 4 の實施成績の及んだ

特開2001-6097(3)

果敢を第4に、所定形状の第8を入れることにより、ひれの後面を分岐に応じて変換することが出来る。内腔の面が外周の形状となり、液も液れた液面作用を発揮する。

#### 【発明の効果】

這方を固定した状態で作成したひれの面は、円錐状の内腔をもち作り水を吸えるから、平板状ひれより効率がよい。

内腔の面は、運動方向に傾斜して運動する時に、面であるから、方向性に優れた吸入作用をする。

この内腔は、運動の時点で、適やかに反転した後に、ひれの面に受ける圧力は、ひれ面に分散され、総動機はストッパーのような機能がない。

内腔の面は、計画的に変換することが出来る。

構造が非常に簡単、液れ液面の取り付けが容易かつ堅固である。

#### 4. 図面の簡単な説明

第1図は第1実施形態を示す平面図

第2図は第2実施形態を示す側面図

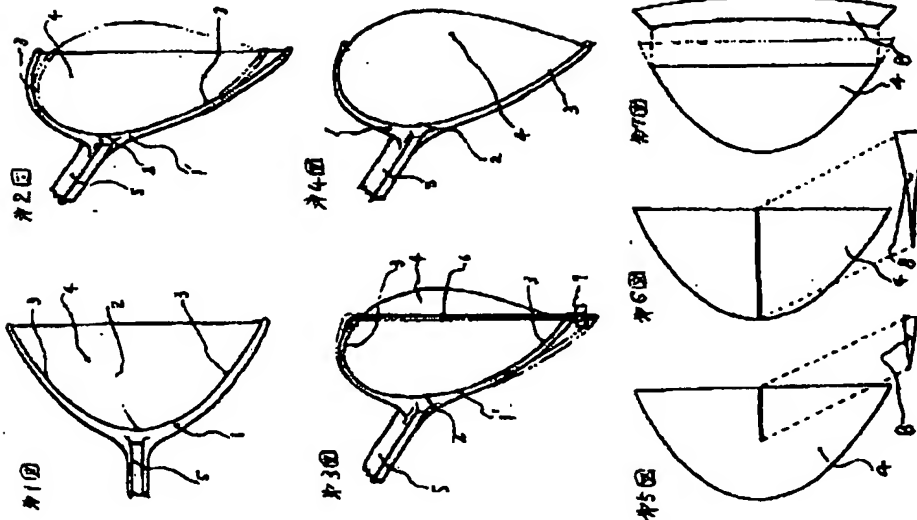
第3図は第3実施形態を示す側面図

第4図は第4実施形態を示す側面図

第5図、第6図、第7図は第5実施形態を示す平面図である

1……ひれ、1'……知覚性ひれ、2……部、3……部、4……部、5……部、6……部、7……部、8……部

特許出願人 田中紀一



-551-